

古くより、木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川の下流域に広がる輪中地帯は水害が多発し、三川の分流工事を行うことが地元民の悲願だった。宝暦治水とは、江戸時代の宝暦4年（1754年）2月から宝暦5年（1755年）5月にかけて幕府の命により薩摩藩が資金と人手を負担して行った木曾三川の治水工事という。

総工費は40万両

総勢約9500人を派遣して行われた工事は区間総延長約112キロと広範囲に及び、総工費は約40万両（現在の価値で約3000億円）を要した。

工事は数次の出水で作業が思うように捗らず、幕吏の強い督責から自刃する者も続出し、また粗末な食事と重労働から体力が弱り疫病に罹る者も多く、総勢の約1割に当たる88名の犠牲者が発生した。

1年3カ月の工期を経て治水工事は完成したが、幕府検分一同その出来映えに驚嘆した

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第3回 岐阜県・千本松原



一般財団法人 日本不動産研究所

明治初期の近代土木技術を用いた木曾三川大改修を経て現存に至るが、その根底部分は宝暦治水により形作られたものだ。

千本松原は、岐阜県海津市海津町油島、長良川及び揖斐川の河口域に所在する治水神社を起点に約千本の松が生い茂る異勝地だ。

治水神社は、治水に尽力した薩摩藩士の功績を讃え、総奉行であった平田靱負（ひらたゆきえ）の遺徳を偲び、犠牲となった薩摩藩士を慰霊する社だ。工事後堤防沿いに植えられた九州産の日向松の松原が約1キロ続き、中には樹齢



陣頭指揮に当たった薩摩藩家老、平田靱負の像

は無理難題と思えば腹が立つが、同胞の難儀を救うのは人間の本分であり、耐え難きを耐えて、この難工事を成し遂げるなら、御家安泰の基になるばかりでなく、薩摩武士の名譽を高めて、その名を未永く後世に残すことができる」

地元に残る薩摩への思い

記憶された偉業「宝暦治水」

と語られている。

木曾三川は宝暦治水の後、

約二百年の大きな松があり、望み松、偲び松など様々な名前が付けられている。千本松原は地元の人々にとって、遠い昔の治水工事への感謝と故郷の安穩を感ずる憩いの場として大切にされている。

薩摩義士を偲ぶ

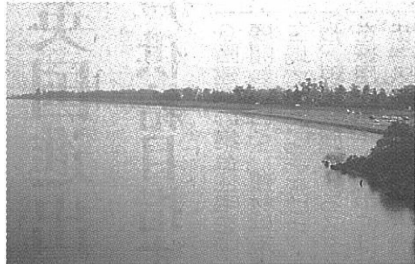
治水工事は薩摩藩家老の平田靱負が総責任者（総奉行）として指揮を取った。当初、幕府の命令に薩摩藩は反発を強め「命令を突き返し、一戦を交えても断るべき」という意見も出る中で、平田靱負

と説き伏せ、工事を引き受けたいとされている。平田靱負は、工事が完成し国許に報告を行った翌日、多額の費用と多数の犠牲者を出した責任を一身に負い切腹した。

工事後約265年を経過してなお記憶される偉業を遂げた薩摩義士は以て瞑すべしと言えよう。ともすれば目先の利益や事情に流されて大計を見失いがちな現在、宝暦治水・千本松原は不動産に携わる者として心に留め、戒めとしたい情景である。（岐阜支所／不動産鑑定士・西村隆）



難工事を伝える宝暦治水之碑



九州産日向松が続く千本松原